

令和2年度 奈良市立大安寺幼稚園 研究実践概要

園長名 阿部 靖子

全園児数 32名

1. 研究主題 「豊かな心、たくましく生きる子どもの育成を目指して」
ー子どもの心の動きに寄り添う環境構成や保育者の関わりのある方についてー

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

本園は奈良市の中心部に位置し、近くには大型の商業施設や寺院などが多数ある。近年は近隣のこども園の設置や子どもの減少・保護者のニーズの変化等により、本園の在園数は減少してきている。また、個人的に配慮を要する子どもが年々増加している姿があり、個々の育ちにあった関わりや教育環境を構築していく必要がある。そのために保育者は幼児を理解する目を育て、環境構成や関わり方について学び、「豊かな心とたくましく生きる力」をもった幼児を育てていきたいと考え、この主題を設定する。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

「幼児の姿と成長の過程」「したい気持ちや力を存分に発揮できるような環境」「主体的な活動を促す保育者のかかわり」について探ることで、保育者の資質向上を図り、豊かな心を持ち、友達の気持ちがわかる力、自分の思いを伝える力、工夫したり考えたりし最後までやりぬく力、身の周りの事を自主的にしようとする力をもった、たくましさのある子どもの育成を目指す。

②研究の重点

- ・幼児の姿から内面を理解し、主体的に活動するための環境や保育者の援助及び指導のあり方について、常に自分の保育を振り返り、計画的・継続的に実践する。
- ・豊かに活動する子どもを育成するための保育内容を工夫する。
- ・なかまとともに生活する中で、自分の思いを表現することや相手の気持ちを思いやる心を育み、共に解決していくことのできるなかま作りをする。

③活動の方法

【5歳児】7月の事例 『ダイヤモンドつくりたい』

◎遊びに必要な道具を選んで、試したり工夫したりして、自分のイメージしたことを実現しようする。

◎友達とイメージを共有し、考えを出しあい、遊びや活動と一緒に取り組む。

「夏やから、プールがあったら虫さん喜ぶかも」と思い、プラスチック容器を使い、虫のプールづくりを始めた。油性ペンを選び塗ってみるが、色が出なかった。その時、何故、色が出ないのかを子どもたちに投げかけてみた。「油性ペンは、油のペンだから水には強い。だから色がでない」「水性ペンは、水より弱いから色がでるねんなあ」とA児が気付いたことを周りの友達に伝える。B児が「次は水性ペンで色塗ってみよう」と色をつけて水を注いでみた。周りの友達は「ほんまや水色になった！」水性ペンで色を塗ると色水ができることを発見した。

答えをすぐに出すのではなく、自分たちで考えたり、意見を出しあい発見できるようにしたい

その後、いつでも取り出して遊べるように卵パックや、仕分けできるプラスチック容器、水性ペンなどを子どもの見えやすい場所に置いておく。A、B、C、D児がプラスチック容器、水、水性ペンを用意して遊び始める。カップの底に色を塗って水を灌ぐと色が出た。「わあ、赤色の水になった」「水いっぱい入れたから薄い赤色になった」と水の量の加減により色の濃さにも気づく。「その色きれい！つくり方教えて」とつくり方を教え合う姿もあった。また、出来上がった色を見せ合い喜ぶ。B児「もっと色々な色つくろう」と今度は卵パック、小分けされたプラスチック容器を持ってきて机をつくり始める。「今度は色を混ぜてみよう」と2色以上のペンを塗って色を作った。「赤と黄色を混ぜたらオレンジになった」と色の変化を楽しむ。また、出来上がった色水を加減しながら混ぜ、新しい色づくりも楽しんだ。出来上がった色水を見ていてE児が、「キラキラしてきれい」「ダイヤモンドみたい」と発言したことで、色水で「ダイヤモンド」をつくることになった。保育者が、「どうやって、ダイヤモンドにする？」と投げかける。E児「硬いから、凍らせたらどうかな」と提案し、話し合い、冷凍庫で凍らせてみることになった。

以前の経験を思い出して自らやってみようと思えるように環境を整えておく

試行錯誤しながら、友達と思いや考えを伝え合ったり、喜びや発見を楽しんで欲しい

【考察】 虫捕りを楽しんでいた子どもたちが、もっと一緒に遊びたいと思い、虫の家づくりを始めた。自分たちと同じように夏なのでプールがあったら喜ぶかもとつくり始め、「水の色つけてあげよう」と油性ペンを使ってみたが、思っていたものが出来ず「なんでかな」と考えてみた。絵を描いたり、色を塗ったりすることにつかっていた「ペン」を別の遊びに使ってみることで、驚きと発見があった。そこから広がった「色水遊び」だったと考える。色々な素材や材料を置いておくことや、試したり見比べたり出来る環境、物、時間があることで、友達と出来たものを見せ合い、違いに気付き、イメージが膨らみ「ダイヤモンドをつくってみたい」という好奇心が高められたのではないかと考えられる。

【4歳児】10月の事例 『ハンターごっこわたしもしたい！』

◎異年齢との関わり親しんで遊ぶことを楽しむ。

テレビを見て興味をもった5歳児が遊んでいた鬼ごっこ「ハンターごっこ」(捕まると牢屋に見立てた鉄棒のところに行く)に興味をもち、同じように「やってみたい」という気持ちが大きくなるが、なかなか声が掛けられない様子だった。その様子を見ていた保育者は、ある日、遊びたそうな表情をしている子どもと一緒に5歳児の子どもに「一緒にしたい」という思いを伝えた。5歳児と一緒にしている様子を見た数名の子どもが「私も一緒にしたい」とさらに声をかけた。5歳児は快く受け入れ、皆で鬼ごっこを楽しんだ。しかし、皆鬼がやりたい気持ちが強くなり、大勢で鬼役をすることが多くなった。「誰が鬼が分からない」と4歳児の子どもが不安そうな表情を見せたので5歳児にその気持ちを伝えに行った。そこで5歳児が4歳児に分かりやすくルールを伝えてくれた。その後、4歳児のクラスの子どもたちは一緒に引き続き一緒に遊び、楽しむことができた。

4、5歳児が交流できる気持ちを大切にする

子どもたちの不安な気持ちに気付き5歳児との遊びが継続できるように声をかける

【考察】6月から幼稚園生活が始まり、今年は異年齢で過ごすことが例年より少なく、なかなか交流できずにいた。4歳児は5歳児を意識していたが、スムーズに関わるのが難しかった。保育者が子どもの気持ちに寄り添い、きっかけづくりをすることができたことで、子どもたちの思いが実現された。このことが4、5歳児の関わりが深くなったきっかけとなったと考える。

【4歳児】10月の事例 『 トロルどうやってつくる? 』

- 友達と思いを伝え合いながら共通のイメージをもって遊ぶ。
- 必要な材料を考え、工夫しながらつくることを楽しむ。

11月の誕生会の保育者の出し物で、「三びきのやぎのガラガラどん」のエプロンシアターを見たことから、「トロルつくってみたい」という声が出る。次の日、子ども数人が集まって、トロルについて話し合っている姿が見られた。A児B児は「トロルは怖い顔していた」「(エプロンシアターの)トロル青色やったなあ」と自分の考えを伝えている。
「トロルなにで作つろうかなあ」と悩みながら材料が置いてある棚を見ていたが、なかなかイメージがわきにくかったのか、その日の自由選択活動の時間は違う遊びに向かっていた。子どもは今日の出来事として、「トロルつくりたかったけど難しかった。」とクラスの友達に向けて話す。

次の日、子どもは材料が置いてある棚を見て、「トロルつくる。」と、青いカラーポリ袋を指さして、「こっちがいいなあ」と言う。それを見たB児は「中にいれるものもいるね」「部屋には(中に)入れるのいいなあ」とA児はB児と保育者に話す。A児、B児は材料庫に、トロルの中に入れる物を探しに行く。材料庫にある、緩衝材を見つけ、「これがいい」と笑顔で保育者に話し、緩衝材の入った段ボールをA児B児は保育室に持っていった。保育室に戻ってきたA児B児は「見て!こんなの見つけてん」とわくわくした様子で周りの友達に話している。A児B児は嬉しそうに緩衝材を袋の中に入れて大きく膨らむようにしている。膨らんだ青い袋を見て満足そうに結ぼうとしているが難しかったようで保育者に「結んでほしい」と伝える。A児は材料が置いてある棚を見て、ペットボトルキャップを手に取り、「目にしよう」と付けてみようとしてみるが「あ、これ小さいわ」と言う。B児は「もう少し大きくしたらいい」と提案し、A児は「大きいやつなにあるかな」と考え、A児B児一緒になって廃材が入っている箱を見て探す。A、B児は廃材を探していると、透明の大きいゼリーカップを見つけて、「これいいなあ」「大きいほうが怖いな」と笑顔で顔を見合わせている。

そこへ数人の子どもが「何しているの?なんか楽しそう」とやってきて2人の様子を見ている。「トロルつくってる。怖いやつ」と説明する。「いいなあ。私もつくりたい」と、A、B児に話している。「それじゃ、私はトロルの髪つけたい」「んじゃぼくは口つけたいなあ」とそれぞれ4人が顔を見ながら喋っていると、A児は少し考え、笑顔で「皆で作つろう」と言い、トロルの髪や口をつくろうと話をしながら遊ぶ姿に繋がっていった。

製作する時に必要な机や、イメージを共有して遊べるように、用具や素材を使いやすいように整理しておく

自分たちで必要なものを用意したり、身近な材料を見つけたりして遊びを進めてほしい

自分の気持ちを伝えながらトロルづくりを楽しんでほしい

【考察】最初は「難しい」と感じ、一回諦めた様子だったが、クラスの友達に困ったこととして話したことをきっかけに、イメージを共有しながらそれぞれが必要と思うものを出し合い、つくり進めていく姿に繋がっていった。子どもたちの「何がつくりたいか」「何が必要か」ということを友達と一緒に思いを共有し、また、絵本を読んだことによって、子どもたちの中でイメージが広がったのではないかと考える。友達と一緒に必要な材料を探しながら、自分の思いを伝え、友達との言葉のやりとりをしながら、つくることを楽しむことができた。

【5歳児】1月の事例 『あった!!しもばしら』

- ◎冬の自然に興味や関心を持ち見たり、触れたりしながら、季節を感じる。
- ◎霜柱が、どんな場所に出来ているのか、どうやって出来たのかを知る。

保育室に氷、雪、霜柱などの絵本をいつでも手に取って見られる場所に置いておいた。A児が、霜柱の絵本を見て、「先生、これ何？変わった形やなあ」と言うので「しもばしらっていうのよ」と話をする。その日、皆で「しもばしら」の絵本をみる。畑や山の表面などに出来ることを知り、「幼稚園の園庭でもできるかな」という話で終わった。2日後の朝、園庭で遊んでいたA児が、「先生！しもばしらあったよ」「はやく！きてきて！」と興奮気味に知らせにきた。「どこでみつけたん？」とその声を聴いていたB児と一緒にA児についていってみる。築山に霜柱を発見したようだ。「みて！みて！ほら」土をめくって掌にのせてみせてくれた。「氷のほそい針みたいなのがたくさんついてる」「これ長いけど、これめちゃくちゃ小さい」「手で、つぶしたら、ギョウって音した」と見たり、触って感触を確かめたりしている。「こっちにも、あっちにもいっぱいあるわ」「土めくってみよう」とあちらこちらの山肌をめぐり、沢山出てきた霜柱にびっくりしていた。次の日にはできず、しかしその次の日には、沢山の霜柱が出来ていた。「どうやって、できているのかな」という声があったので、もう一度絵本を見て考えてみることにした。霜柱は、「土、水、寒い日（0度以下の温度）が必要だということがわかった。その後も、今日はできているかな？と「しもばしら」を探している。

身近に、写真や絵本を置くことで興味関心をもてるようにしておく

実際に霜柱の感触を感じたり大きさを比べたりして発見と驚き、喜びを共に感じる

【考察】 冬ならではの自然の現象を保育者が学び、絵本や写真など子どもたちが自ら学べる環境を用意しておくことが大切だと感じた。初めは、紙面での学びだったが、霜柱の形や名前を知っていたことで、発見する事が出来、見つけた喜びを保育者や友達に知らせることが出来たと考える。

5. 研究の成果

与えられた環境ではなく、自ら遊びに使いたいものを選び、遊びに取り入れていくことができる環境が大事であり、「こうするだろうという」保育者側の援助ではなく、子どもたちの遊び、発想から生まれた思いに共感し寄り添いながら、援助や環境構成をしていくことが大切であると感じた。また、今、興味や関心をもっていることは何か、成長の過程はどのかなのかを把握し、子どもの思いが実現できるように、保育者間で共有する時間を持つことや、子どもの思いに耳を傾け、一緒に考えていく過程を大切にしていけることで、自ら遊びを選び、考え、意欲的に活動できるということを改めて感じた。

6. 今後の課題

子どもたちは、広い園庭と、豊かな自然を十分に取り入れ、主体的にやりたいと思う遊びを見つけ、仲間とともに充実した園生活を過ごせていたように思う。しかし、子どもの育ち、興味、関心に沿った援助と環境構成が出来ていたかという点、まだまだ課題が多い。

これからも一人一人の心に寄り添い、主体性をもって楽しめる、そして遊び込める為の援助と環境構成を考え、更に学んでいかなければならない。また、身近な環境構成を整理し、自ら考え、試し、遊びを進めていけるような環境の再構成もすることが必要である。